

農業新規参入者の文化人類学
—北海道平取町における担い手意識に着目して—

小 西 香 菜

小西 香菜

要旨

本研究の目的は、農業新規参入者に焦点を当て、平取町へ就農したことにより得られる変化について明らかにすることである。また、平取町の就農支援体制と農業体制を背景に、新規参入者が安定した農業生活を実現できる要因は何か、新規参入者と平取町との関わりについて分析した。対象者である農業新規参入者とは、非農家出身者が以前の職業を退職して新たに農業に従事する者を示す。

従来の新規参入者に関する研究は、個人の就農過程や営農内容について記されていたが、就農先の地域との関わりについての視点は明らかにされていなかった。農業の労働人口の減少や高齢化が懸念される現代において、新規参入者の生活への積極的な目線が必要である。そのため、本調査では新規参入者誘致に力を入れている平取町振内地域に就農した新規参入者を中心に調査をおこなった。

本研究では新規参入者の男女9名にインタビュー調査をおこない、その結果を①就農の動機、②生活観の変化、③労働観の変化、④農業観の変化と4つのカテゴリーに分類した。インタビューの結果から、以下の知見に至った。①新規参入者が地域への就農意識を決定づける要因として実現可能な就農体制の整った地域の存在が不可欠である。②新規参入者は地域に農家として、住人の一人としての意識が生じることで人付き合いの重要性を認識するようになった。③農家として働くことで労働と生活が交わり、農業が自身の生活の一部となった。また、目的意識をもって労働に取り組むよう意識が変化した。④新規参入者は農業を営む上で様々な葛藤を抱いていた。

本研究により、新規参入者が平取町で得られた生活観、労働観、農業観の変化の背景には、農家として仕事である農業に取り組み、町の住人として地域活動にも関心を寄せ積極的に取り組む、この二つの側面からなる意識が関わっていることが明らかになった。また、平取町と振内町の新規参入者に対する支援体制がその意識をつくる要因となっていた。

農業の衰退は依然として歯止めがかかっておらず、農家の不安を払拭できるような対策が求められている。近年では農業の大規模経営化が顕著になり、農家の形態として小規模農家と大規模農家の二極化が進むと思われるが、小規模農家への目線は保ち続けてゆくべきである。小規模農家は大規模農家と比較すると生み出す利益は低いと思われるが、地域を活性化させる要員であると考え。平取町での調査を通じて、農家として、また地域住人として活動していた彼らの姿を振り返り、どちらか一方に偏らない目線が今後豊かな産業としての農業を導く要因の一つになると考える。

1. 問題の所在

北海道において農業は広大な農耕面積を誇り、専業農業地帯として今日の基幹産業となっている。しかし、近年の農業情勢による離農者の増加、農業人口の高齢化により農業は疲弊の一途をたどっている。この状況を背景として、新規参入者が地域農業の担い手となるべく期待されている。非農家出身者がそれまでの仕事を退職して新たに就農する農業新規参入者を対象に、独自の支援制度が整う北海道平取町びらとりちょうでの生活について調査をおこなうことで彼らの地域との関わりについて明らかにする。

北海道日高管内に位置する平取町では農家の高齢化が進み、衰退を回避すべく新規参入者の受け入れをはじめた。町内ではトマトの販売体制が確立されており、新規参入者はこの制度を利用することで販路を確保している。また、振内地区ふれないでは、地域の既存農家と新規参入農家が後に続く新規参入者を支援するため「ふれない新規就農者受け入れ協議会ネオフロンティア」を立ち上げ、研修受け入れや助言を通じ技術習得を手助けするなど技術面と生活面を支援することを目的としている。

新規参入者に焦点を当てた研究はこれまでもいくつか挙げられる。安藤(1999)は茨城県内の新規参入者6名を対象にインタビュー調査をおこなった。秋津(1998)は兵庫県3名、香川県4名を対象に、また和泉(2012)は千葉県、長野県、埼玉県、滋賀県の4名を対象に調査をおこなった。いずれの調査も新規参入者個人の就農過程や営農内容については記されていたが、就農地域との関わりといった視点は明らかにされていなかった。新規参入者を地域農業の担い手として捉える上で、それぞれの就農前後の意識変化の傾向を平取町の新規参入者を対象に分析した。

小西 香菜

2. 研究の目的

本研究では、農業の新規参入者を対象に都会から平取町へ就農したことにより得られる変化について明らかにする。また、平取町の支援体制を背景に、新規参入者が安定した農業生活を実現できる要因は何か、新規参入者と平取町との関わりについて分析したい。

新規参入者の就農者数は、新規学卒就農者、Uターン就農者と比較すると少ない傾向にある。原因としては、新規参入者は非農家出身者であるため就農に対する抵抗感や農村での困難がより深刻な問題として捉えられるからである。農業の労働人口の減少や高齢化が懸念される現代において、これまで少数派として見られた新規参入者に対する積極的な目線が必要である。

本研究では、新規参入者の都会と農村とでの暮らしの変化を就農の動機、生活観の変化、労働観の変化、農業観の変化とそれぞれ4つのカテゴリーごとに明らかにする。

3. 先行研究

まず、就農動機について安藤（1999）は農業へ新規参入する層は近年増える傾向にあるが、理由としては脱都会志向や景気の後退といった社会情勢の変化によるものであると指摘した。また、甲斐（2005）によると高度経済成長期に人口が増大し大都市に集中する中で「田舎から出た方が良い」「消費社会志向」との価値観が人々に広まり、都市と農村との経済格差から多くが都市に流出した一方、雇用が悪化し将来の見通しがつかない人の割合が高まる現代では「自分が何をしてどのように生きたいか」との価値観を抱いて農山村へ向かう人々も出現するようになったと指摘している。更に全国新規就農相談センター（2009）によると、新

新規参入就農者490人を対象におこなった就農動機へのアンケート結果は、「農業が好きだから」「自然や動物が好きだから」といった自然・環境志向の理由が多かった。また、「食べ物の品質や安全性に興味があったから」「有機農業をやりたいから」といった安全・健康志向の理由も多くなっている。その他、「自ら経営の采配が振れるから」「努力の成果が直接見えるから」「農業はやり方次第で儲かるから」といった経営・独立志向は20代、30代に多く見られた。サラリーマンに向いていないから、都会の生活が嫌になったからなどの理由のみでは新規参入は難しいと指摘した。

次に農村での生活に関しては田畑(1986)によると、北海道の農家同士の関係は流動的で非固定的であり、拡散かつ部分的性格が強い。生産や生活面では他府県の農家と比較すると個性が強かった。その流動性の一定の緩和や定着化と共に地縁的結びつきが安定化し、農家の生産と生活面の近隣互助機能を担ったが、農業指導と農協の利用のための機能的組織であり村落外や市街地との結びつきがより多く、村落内での結びつきは弱かったと指摘する。

更に、新規参入者の労働について秋津(1998)は新規参入者の営農形態を「事業志向型」と「生活志向型」に分類した。前者は地域において特定の農業経営展開を重視する層のことを示し、後者は農業経営よりも都会から隔絶した自然に囲まれる生活を重視する層であると述べた。秋津の調査では新規参入者におけるそれぞれの割合は1980年後半には事業志向の減少と生活志向の増加が見られた。近年では生活志向が強まっていると指摘した。また、小野(1997)は、新規参入者のタイプを「農業で生計を立てたい」という農業専門志向を持つものと、「農村で生活したい」という志向をもって農業をおこなおうとする田舎暮らし派の二つに分かれることを指摘し、田舎暮らし志向の中には更に専門でなく副業的に農業をおこなう者がいることを指摘している。

小西 香菜

4. 分析の手続き

北海道沙流郡平取町に就農した農業新規参入者を対象とし、元々は農家以外の職業に従事し退職を経て新たに平取町に就農した20代後半～50代前半の男女9名に、2014年8月～12月の間インタビュー調査をおこなった。

5. 調査の結果

前述した20代後半～50代前半の男女9名への調査の結果を以下に述べる。

5-1. Aさん(50代前半 男性) 就農年数17年、教育関連勤務(埼玉県)

1. 就農の動機

埼玉県の大学卒業後、県内で教育関連に勤務。勤務先の待遇が良くなかったことから転職を考えた。農業系の大学を卒業した妻の勧めもあってこの年齢からでも挑戦できる農業が選択肢に上がった。

就農相談会において酪農に携われる地域の説明も受けたが、その地域の相談員から平取町でのハウス栽培を進められた。また、複数の農村地域の就農条件を見比べて、年齢やその他の条件を合格できたのが平取町のみであった。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、埼玉県で働いていた頃は昼から仕事が始まり帰りは夜中であったことから近所づきあいは皆無であった。平取町は地域農家が協力して生産率を上げているため、町内農家は技術や知識を率先して教えに来てくれる。Aさんは周りで見られている意識があることからきちんと農業の成果を出さなくてはならない意識が芽生え、自然と農業への

めりこむようになった。

労働観に関して、サラリーマンは職場と家が完全分離しているが農家はそうではない。振内町はハウスのすぐ横に自宅が建っているため、農家は自分が決めた時間にハウスで作業をして、帰る時間も自分で決められる。

農業観に関して、ブランドトマトの生産を主軸にしている平取町であるが、このままの体制ではいつかよその町に売り上げを抜かされると考える。ブランドに頼っていると消費者に飽きられた時点で何も残らなくなり、そうならないように作ってゆかなくてはならない。また、農業は少し軽蔑を含んだイメージを持たれていると思われる。行政の対応を見ると、未だに百姓は生かさず殺さずという印象があり、それが払拭されないと興味は持たれない。

5-2. Bさん(50代前半 男性) 就農年数10年、会社員(東京都)

1. 就農の動機

東京都内の大学を卒業後、都内の会社に営業職として勤務。会社では責任がのしかかる環境への息苦しさから、ものをつくる仕事に興味があった。就農のきっかけは農家をしているBさんの父親の勧めもあったが、自然の中で過ごす生活への憧れから北海道への就農を決めた。

新規就農相談会に行き、相談員から就農支援とその後の農業指導の体制が整っている平取町を進められ、トマト一本で生活ができる平取町での就農を決めた。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、Bさんは振内町のネオフロンティア¹に参加している。活動内容は、新規就農相談会に説明係として参加する、新たに町内に就農した新規参入者の様子を見て必要に応じて農業指導するなど、後輩農家の手伝いである。また、冬場は町内でおこなわれるカーリングなどに参加して色々な人と交流するようにしている。

小西 香菜

労働観に関して、会社に勤めていた頃と比べると、暑さや寒さを感じながら人間らしい生き方ができていると感じる。距離が近い隣ハウスの収穫量と自分の収穫量を比較して、それに後れを取らないよう頑張ろうという意識になる。

農業観に関して、平取町の農協を通じた販売制度について、農協に販売を任せることで農家がトマトづくりに専念できる農協と農家の持ちつ持たれつの制度は良いと考える。平取町は新規参入者の就農数が多い全国でも珍しい地域であるため、それを継続させられるよう自身も支えてゆきたいと考える。

5-3. Cさん(40代前半 女性) 就農年数7年、会社員(横浜市)

1. 就農の動機

東京都の大学を卒業後、都内の企業に勤務。Cさんはフルタイムで働いており、子供を保育園に朝7時から夜7時まで預ける生活を続ける内に会社勤めに疑問を持つようになった。

東京での新規就農相談会に参加したところ、経済的に新規参入者が取り組みやすいハウス栽培であり、就農後の農業指導体制が整う平取町であれば農家として家族で生活してゆけると思い就農を決めた。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、Cさんはネオフロンティアに所属し、新規参入者誘致のための活動をおこなっている。お祭りや子供のPTAを通じ地域とのつながりもある。

労働観に関して、関東にいた頃は近所付き合いがなく、自分の家庭と仕事を守ることで手いっぱいであったが、振内町では地域のために何が出来るか考えるようになり、地域の一人としての意識が強まった。関東の暮らしではCさんの夫と子供と一緒に過ごす時間は限られていたが、現在は夫が子育てに関わっているのが大きな変化である。毎食家族で御飯が食べられる普通の生活にCさんは幸せを感じている。

農業観に関して、平取トマトはブランド化している以上、規約を守るのは仕方ないことである。自由な農業をやりたい気持ちはあるが、農協に全作物を買い取らせて生活の安定を保証しているところを魅力に感じて平取町に就農した動機もあるため、一概には今の体制を崩したくない。また、実際の地域での自身の役割など、地域の一員になるということとは何を意味するのか知る機会が増えれば農家への理解も広まる。

5-4. Dさん(30代後半 男性) 就農年数6年、営業職会社員(東京都)

1. 就農の動機

東京都の大学を卒業後、都内の企業に営業職として勤務。始発電車で出勤して終電で帰る生活が続き、Dさんは家族で過ごす時間を得るために転職を考え、転職先の候補の一つとして農業に関心を持っていた。

東京都で開かれていた北海道就農フェアに参加した際、相談員に平取町での就農を進められ、実際に平取町へ体験農家に行き農家の人々が良くてくれたことをきっかけに就農を決めた。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、Dさんは町内の仮装盆踊りなどのイベントに地域を盛り上げるため参加している。新規就農したての頃から町の消防団に所属しており、知り合いをつくることと高齢化が進んでいる地域の力になるよう入団した。

労働観に関して、東京で働いていた頃は人と本音での会話は少なかったが、農家の人とは本心を言わないと馴染めないと感じられる。また、東京で働いていた頃は良いことをされるとお返しをしなくてはならない意識があったが、振内町ではお礼は労働で返す習慣がある。また、農業の面白さは、Dさんがやってきたことがそのまま帰ってくることであり、全て能力として備わるところである。農業は頑張った分だけ金額や経験として実感できるところに面白味がある。

農業観に関して、平取町内の農業人口が高齢化していることを見越し

小西 香菜

て、町として新規参入者の受け入れ数をもっと増やすべきである。現在は本町に1組、振内町に1組計2組の新規参入者を毎年募集しているが、4組に人数を増やして積極的な呼び込みと受け入れの体制を整えるべきである。

5-5. Eさん(40代前半 女性) 就農年数3年、医療職(茨城県)、専業主婦(茨城県)

1. 就農の動機

茨城県の専門学校卒業後、県内の施設に医療職として勤務。会社に勤める夫との結婚を機に退職し、専業主婦となった。Eさんの夫は会社組織の一部として働くのではなく、自分の判断のできる農業に興味があった。農業大学校に三ヶ月通い農業を学ぶうちに、太陽のもとで土をいじりながら仕事をする楽しさに目覚め就農を決意した。

新規就農相談会に参加し、最も就農時の支援や就農後の農業指導の体制が整っていた平取町に就農を決めた。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、Eさんはフレッシュミズと農協女性部に所属し、正月のもち撒きに使う餅づくりといったイベントを定期的で開催している。町内会にも家族で参加しており、同年代だけではなく上の年代の農家とも知り合いになれる。就農した際に周りに誘われる形で色々な地域活動に参加した。また、茨城県にいた頃は地域活動には参加していなかったがここでは大人も行事を楽しむ意識が強く、何でもアドバイスをくれる雰囲気がある。

労働観に関して、振内町では働く場所も家も同じところにあるため仕事と家庭生活が混ざる感覚があり、農家の子供は両親と一緒に家や畑の手伝いをおこなっているため、子供は畑で遊んで手伝いもする文化は平取町では共通している。

農業観に関して、平取町のように土地が用意されており、農業指導の

内容も充実している支援体制が厚い地域は新規参入者には不可欠である。また、生産したトマトを全て農協に出荷する体制もトマト栽培に集中して収穫量を上げられることができる。農業は作業をするにもほこりまみれ、汗まみれになって仕事をする印象が強く、実際きつい仕事である。これで食べてゆこうという覚悟がないとやれる仕事ではないと思われる。

5-6. Fさん(30代後半 男性) 就農年数1年、接客スタッフ(京都府)

1. 就農の動機

大阪府の大学を卒業後、京都市内の料理店で接客スタッフとして勤務。形あるものを生むやりがいのある仕事に挑戦するため、夫婦二人で取り組むことができる農業への転業を考えた。Fさんの妻の実家が兼業農家であったことも影響している。

Fさんは転勤により北海道に移り住んだ際に地元農協に新規就農の相談を持ち掛け、平取町への就農を進められ農地視察を通じて平取町への就農を決めた。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、Fさんは青年部に所属しており、祭りへの参加、餅まきの餅つきなどに継続して参加している。地域の太鼓サークルにも所属しているため、農作業が終った夜は活動に参加している。Fさんはこの活動を通じ農家以外の知り合いも増やしたいと考える。また、振内町では農家同士助け合う関係性が続いている。以前の暮らしでは得られなかった人との距離の近さがここでの暮らしの魅力である。

労働観に関して、企業の中でのFさんは歯車の一部であり、責任はあってもできることはないと感じていた。農業は収穫量や家族の生活を支える責任感はあるが、できることは無限にある。また、労働と生活が混ざり合っている感覚があり、子供と一緒にハウスへ仕事に行ける環境は会社勤めではできない。

農業観に関して、平取町は収穫したトマトは全て農協に卸して販売さ

小西 香菜

れるため、その分トマト栽培に専念できる良さがある。また、農業に対する人々のイメージは根本的には良くないと考える。その意識が変わらない限り人が農業に積極的に関わりたいとはならないと考える。

5-7. Gさん(30代後半 男性) 研修2年目、会社員(横浜市)

1. 就農の動機

東京都の大学卒業後、横浜市の会社に勤務。北海道で暮らすGさんの母親が病気になったことをきっかけに、両親の面倒を見るためにそれまでの職場を辞めて北海道へ移り住んだ。道内でキャリアを活かせる職場を探したが見つからず、Gさんの父親の勧めもあって農業への就農を考えた。

東京で開かれた就農相談会に妻と参加して職員の話聞き、平取町で農業体験に参加することで就農を決めた。Gさんは始め農業に興味があったわけではなかったが、妻や父親の後押しがあって決断した。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、Gさんは娘が通う小学校のPTA活動に参加しており、運動会準備、学校内の農場での農業指導や雑草取り作業をおこなう。横浜市に住んでいた頃は隣人には挨拶をする程度の関係であった。振内町では地域でのつながりを重要視しており、人付き合いの価値観は都会とはかなり異なっている。また、農業は人に助けてもらわないとできない仕事であるため、誰かが困っていると手伝いに行くことは当然であり、手が回らなくなると助けてもらおうお互いさまの精神は根付いている。

労働観に関して、生活のためにトマトを育てている感覚があり、仕事をしなくてはならないから振内町で生活しているという感覚もある。横浜にいた頃は、仕事は仕事であり、他人は他人として割り切って考えていた。

農業観に関して、農協はトマトをつくる農家がいないと組織を維持できず、農家もトマトを売る農協がなくては生活できない。持ちつ持たれ

つの関係であり、この体制があるからこそ今の大規模でのトマト栽培が実現できている。販売までも農家が担うとその分農業に集中できなくなる恐れがある。また、農業をやりたくてもできないという希望者は多数いると思われるが、何もない状態から農業を始めるのはリスクが高く失敗するイメージを抱きやすいためなり手が少ないと考える。そのため、農家として地域で一生暮らす大きな覚悟が求められる。

5-8. Hさん(30代前半 男性)研修1年目、IT関連会社員(山口県)、医療施設勤務(北海道)

1. 就農の動機

山口県の大学を卒業後、県内でIT関連会社に勤務。その後北海道の専門学校に通い、卒業後市内道の医療施設に勤務。医療施設で働いたが待遇が良くなく、将来への不安を感じ転職を考えた。以前から趣味として続けていた家庭菜園がきっかけとなり農業に興味を持つようになった。

札幌市で開かれた新規就農相談会に参加し、就農後の生活や農業経営の道筋が立ったのが平取町であったことから就農を決めた。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、地域の行事にはほぼ全て関わるようにしている。Hさんの妻は、農家が生産したトマトを使って料理をつくる会に参加し、小学校や老人ホームでの読み聞かせの会にも入っている。また、人との距離が近いため何かあれば近隣農家に相談でき、Hさんも手伝えることがあれば積極的に関わる意識が強くなった。近隣に住む人々のほとんどが農家であるため互いの仕事の大変さを知っている共通点があり、相談に対し親身に聞くようになっている。

労働観に関して、IT関連企業や医療施設で働いていた頃は、Hさんは組織の一部であり淡々と仕事を進めていた。医療専門職としても、塩分控えめになるよう懸命に試行錯誤しても、結局は病院食として扱われてしまっていた。農家としては、トマトの収穫量で結果を実感できて張り

小西 香菜

合いがある。生産率を安定させて生活を成り立たせるプレッシャーはあるが、Hさんが何をして生きているか実感でき、やればやるだけ賃金として還元されるのが農業の面白さである。

農業観に関して、収穫したトマトを農協に全て卸すことで農家は農業に集中できる環境は良い。しかし、6次産業などの自由な農業をおこないたい場合その制度は障害となる。しかし現時点で農家として生計が成り立つ制度が整っているためそれを維持する必要もあると考える。また、高齢化や減少している農家の担い手として新規参入者は捉えられているが、新規参入の障壁は大きい。辞職して知らない地域に移住し農業を一から始める決意をするには、制度の整う地域でないと敷居は高い。

5-9. Iさん（20代後半 男性）就農年数2年、医薬品販売職（愛知県）

1. 就農の動機

愛知県の大学を卒業後、県内で医薬品販売職として勤務。就職活動中にリーマンショックを経験して以来、企業に所属して働くことへの不信感を抱くようになった。Iさんは、自分が勤める会社が経済的不況により倒産する可能性のある中仕事を続けられないと考え、確かな技術を身に着けるため就農した。

就農先を平取町に選んだ理由は、地元の先輩に平取町での就農に誘われたからである。Iさんの先輩は、大学で微生物学を専攻しておりその知識を活かすため平取町で無農薬野菜を育てている。

2. 生活観、労働観、農業観の変化

生活観に関して、ここでのコミュニケーションは都会より重要であり、農家同士の仲間意識はとても強い。同じ職業意識や互いの苦労が分かっているため、農作業の人手が足りない場合は互いに助け合う意識が根付いている。物でお礼をするのではなく、労働の交換により人間関係が成り立っている。

労働観に関して、農家としては育てているトマトに生活リズムを合わ

せなくてはならず、仕事とプライベートの境界は曖昧になっていると感じる。朝、野菜収穫の為Iさんは早起きして収穫作業をおこなうというように、他にも液体肥料を与える際昼間に作業すると直射日光で肥料が傷んでしまうため、朝の涼しい時間にその作業をおこなうなど、農作業は生活の一部となっている。

農業観に関して、平取町は夫婦そろっての就農が条件の一つであるが、それでは就農の間口が広がらないと考える。離農者を出さないようある程度の条件を提示するのは当たり前であるが、新規参入の壁となっている。また、平取町は品目をトマトに限定せず多様な野菜を作り、しがらみのない農業を実現してほしい。

6. 分析

6-1. 就農の動機

新規参入者の就農動機についてインタビューの結果から、前の職業を退職して就農した理由、就農先に平取町を選んだ理由の二つに分けて分析した。

今まで勤めていた企業を退職した理由として、企業の自身への待遇の不満と会社に所属して働くことへの不満に分けられた。前者は給与が上らず生活に不安を覚えたためなどであり、後者は組織の一部として働くことへのやりがいのなさなどであった。また、就農を考えた理由として積極的理由と消極的理由に分けられた。前者は自然への憧れなどであり、後者は転職先候補の一つとして農業を捉えていた。その他の就農理由には第三者からの影響も見られ、親戚などが農家であることから実際に就農を考えるようになっていた。以上のことから、新規参入希望者が実際に地域に就農するまでには、主に三つの要因を経ていることが明らかになった。

小西 香菜

就農先に平取町を選んだ理由としては、営農計画や土地の確保、就農後の農業指導などの新規参入者への支援措置が手厚いためであった。つまりここから、新規参入希望者は農家としての生活への理想と生計を立てられるかという現実の問題との兼ね合いに悩んでおり、農業新規参入への大きな障壁となっていることが分かる。

6-2. 生活観の変化

インタビューの結果から、地域活動との関わり、都市部と農村とでの人付き合い意識の変化の二つに分けて分析した。

町内の地域活動には、全員が参加していた。ネオフロンティアや農協青年部などの農家で構成された団体の他に、農家とは関係のない活動にも参加しており、農家以外の知人を得る、地域を活性化させるといった意識が見られた。

新規参入者の人付き合いへの意識の変化を都市部と振内町で比較すると、都市部では人間関係は社内で完結しており、近隣住民との付き合いはなくても問題は起こらなかった。しかし、振内町では農業に関する労働の行き来を通じて、農業技術の向上と収穫量を上げる必要がある。また、振内町の住人としても意識しながら生活するようになるといった意識の変化が明らかになった。

6-3. 労働観の変化

新規参入者の働くことへの意識の変化を都市部と振内町で比較すると、会社では社内の仕事は社内で片付け、帰社した後の時間はプライバシーとして分断されていた。また、長時間の労働により家族との関係が希薄になり、自身の会社組織における位置づけも不明瞭であり仕事に打ち込む意識は薄れていた。しかし、振内町では労働と生活が一体化することにより、自然の中で時間を自由に使い裁量のある仕事に励む意識が強くなったという自身の仕事に対する意識の変化が明らかになった。

6-4. 農業観の変化

インタビューの結果から、平取町の農業制度について、農業後継者不足に対する考えの二つに分けて分析した。

農家が収穫したトマトを平取町農協に卸して販売する制度についての意見を聞いたところ、賛成派と反対派に分けられた。賛成派の意見としては、農協に販売を任せることで農家はトマトづくりに専念できる環境が良いといった意見が多かった。反対派の意見としては、平取トマトに一極集中する販売体制を不安視する意見が見られた。ブランドへの信頼がある反面、他地域農家との競争への不安といった二面性のある問題を平取町の新規参入者は抱えていることが明らかになった。

農業の後継者が不足している要因について新規参入者へ意見を聞いたところ、農業が持つイメージの悪さ、非農家の新規就農リスクの高さ、新規参入希望者への積極的な呼び込みの必要性の三つに分けられた。農業の大変さ、人生へのリスク、世間の農業への理解の希薄さなどを述べていた。

7. 考察

7-1. 知見のまとめ

インタビュー調査により、新規参入者について以下の四つのことが分かった。

第一は、新規参入者が農村に就農するまでに四つの要因を経ているということである。一つ目の要因は会社を退職した事実、二つ目は農業への積極的・消極的興味、三つ目は農業に関わる他者からの影響、四つ目は実現可能な就農体制が整う地域の存在であった。新規参入者が就農を決定づける要因として、実現可能な就農体制の整った地域の存在が最も大きく影響していると調査から明らかになり、就農への不安を解消する

小西 香菜

支援体制が新規参入者を誘致する地域に求められていることが明らかになった。

第二は、新規参入者の就農前後で変化した人付き合いへの意識である。都市部では近隣住民とは挨拶のみの関係であり、地域内での人付き合いへの意識は低かった。しかし、振内町において新規参入者は農業関係の団体の他にも学校 PTA やお祭りといった町内活動へ参加することも重視していた。また、農作業などは近隣農家で作業を手伝うことで農業を教え合っている。その背景には、農家として、振内町住民としての意識が要因であると考えられる。農家として困難の多い農業経営を支えて町単位で収穫量を上げ、振内町の一員として町を活気づけることで、新規参入者は地域に農家として、住人の一人として人付き合いの重要性を認識するようになった。

第三は、新規参入者の就農前後で変化した労働への取り組み意識である。会社勤めでは組織の一部として働くことにやりがいが見いだせずにはいたが、労働と生活が交わる農業に携わる中で、工夫を凝らせばそれだけ賃金として、農業技術として経験を積み目的意識をもって労働に取り組むよう意識が変化した。

第四は、新規参入者が抱える農業への葛藤である。平取町で生産したトマトの流通を農協が一手に担う体制が、農家にとって安定した収益を生む一方、ブランドトマト頼みの経営方針を不安視する意識も共通して見られた。また、農業に対する一般的なイメージも良いものではないという意見も見られた。

以上、農家と町の住民と二つの側面からなる担い手意識をもって新規参入者の生活観、労働観、農業観が変化を遂げていることが調査から明らかになった。

7-2. 先行研究との比較

甲斐(2005)は都市へ一極集中した時代から、近年は農村での暮らし

に価値を抱く層がいると分析した。本研究では新規参入者の就農過程を傾向として分析した結果、新規参入者が就農する動機には、主に四つの要因が揃うことではじめて実際に就農にまで結びつくと明らかになった。一つ目の退職した事実、二つ目の積極的・消極的興味、三つ目の第三者からの影響の他、特に四つ目の要因である新規参入者を受け入れる体制の整った地域の有無が就農を左右していた。先行研究の知見と本研究の知見を比較すると、農業や自由な暮らしへの憧れと農家として生計を立ててゆけるかという理想と現実が上手く結びつくと新規参入者は就農を実現できることが分かった。

秋津(1998)は新規参入者の営農形態を「事業志向型」と「生活志向型」に分けた。前者は地域において特定の農業経営展開を重視する層を示し、後者は自然に囲まれる生活を重視する層であると述べた。本研究では、安定した販売体制の整う平取町に就農した新規参入者を対象にしたため、農業への考え方としては生活志向型を理想とする層が多く見られた一方で、近年の農業の情勢を踏まえ利益を生む新たな農業に挑戦する事業志向型の新規参入者も多数見られた。また、それら二つの農業への意識を抱く新規参入者もいた。先行研究の知見と比較すると、新規参入者の営農意識について二つに分類することは難しいと考える。近年の不安定な情勢を踏まえ、農家生活を楽しむことを目的とするのみでは生計を立てるのが難しい状況であることが示唆される。

7-3. 研究課題

平取町振内地域での新規参入者の生活について明らかにするには、新規参入者以外にも既存農家、農協職員、教員など農業に関係のある又は地域活動に関係している人々への目線が欠けていた。また、平取町の就農支援について触れるには、平取町の一部である振内町に限定せず他地区に就農した新規参入者への調査も必要であると考えられる。これらの異なる人物と地域を通じて多面的な側面から新規参入者の生活を分析す

小西 香菜

ることで、彼らの生活がより明らかになると思われた。

7-4. 提言

農業の離農は依然として歯止めがかかってはいない。その解決策として農業の6次産業化²が近年盛んに見られ、付加価値を高めた商品を販売して収益を上げることを目的としている。従来の小規模農業から大規模農業へと、産業としての農業方針の転換が見られている。

将来的に農家の形態として小規模農家と大規模農家の二極化が進む中で、今後農業支援をおこなう際に一方を切り捨てるべきではないと考える。小規模農家は大規模農家と比較すると生み出す利益率は低いが、今回新規参入者を対象とした平取町での調査からも見えたように、地域農家の役目は2つある。自身の農業経営と、地域活性化のための活動である。農家として地域住民として、その地域と深く関わる新規参入者を含む農家への支援は今後とも絶やすことなく続けてゆくことが持続可能な農業を実現する要因の一つとなると考える。

注

¹ 振内町で設立された新規参入者誘致を目的とした団体。離農跡地の幹旋円滑化、農業支援、就農説明会への参加など積極的サポートを既存農家と町内の新規参入者で展開している。

² 1次産業の従事者が食品加工(2次産業)、販売(3次産業)にも取り組むこと。

参考文献

秋津元輝, 1994, 『現代日本の農業観』 富民協会

———, 1998, 『農業生活とネットワークつきあいの視点から—』 御茶の水書房

安藤義道, 1991, 『ザ・ニューファーマー—21世紀を担う後継者たち』 明文書房

———, 1999, 『現代農民のライフ・ヒストリーと就農行動—「納得論理」型

『農民教育の創造—御茶の水書房』

和泉真理, 2009, 「直売から川下との連携へ—千葉県白井市の芦田さんの販売展開—」『経営実務』8月号, 全国協同出版

和泉真理・横田茂永, 2012, 「農業の新人革命」『JA 総研 研究叢書』第6巻, 農山漁村文化協会

江川章, 2005, 「新規就農者の動向とその育成支援—農外からの新規参入者を中心として—」『農業法研究』日本農業法学会

大内雅利, 1993, 『農業問題研究』第37号, 農業問題研究会

甲斐良治, 2005, 「若者はなぜ、農山村に向かうのか: 戦後60年の再出発」『現代農業増刊』69号, 農山漁村文化協会

齊藤博志, 2013, 「新規参入者への支援と地域農業づくり—平取町農業支援センターの取り組み—」『農業普及研究』第36号, 北海道農業普及学会

澤田守, 2003, 『就農ルート多様化の展開理論』農林統計協会

島義史, 2014, 『新規農業参入者の経営確立と支援方策—施設野菜作を中心として—』農林統計協会

白水繁彦, 2008, 『移動する人びと、変容する社会』御茶の水書房

全国新規就農相談センター, 2009, 『新規就農ガイドブック』全国農業会議所出版

田畑保, 1986, 『北海道の農村社会』日本経済評論社

藤江一博, 2011, 「7人の新規参入者が定着し、地域一体で就農支援」『ニューカントリー』11月号, 北海道協同組合通信社

藤田康樹, 1997, 『青年農業者の形成と支援』農山漁村文化協会

北海道農政部, 2013, 『新規就農者実態調査』

安田正之, 2015, 『北海道の農業』北海道協同組合通信社

平取町, 2009, 『平取町の新規参入者受け入れの取り組み』

平取町農業支援センター, 2014, 『平取町農業支援センター通信「あしすと」』第54号

北海道農業担い手育成センター, 2009, 『新規就農のためのガイドブック』

『朝日新聞』2006年5月28日朝刊「『農民誘致』町の活力源 平取新規参入組1億円売り上げへ」

『北海道新聞』2015年12月2日朝刊「農業人口減少 担い手の育成急がねば」『北海道新聞』2016年1月5日朝刊「農業競争力活性化の鍵 企業参入規制緩和で後押し」

農林水産省 <http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/2015/top.html> (2016.1.6 アクセス)

ふれないネオフロンティアのホームページ <http://neo.grupo.jp/> (2016.

1.11 アクセス)